

NPO法人

全日本語りネットワーク

〒376-0045 群馬県桐生市末広町 11-1
JR 桐生駅構内 桐生市民活動推進センター
(Fax) 0277-47-4066 (振替) 00130 - 2 - 114808
(E-mail) welcome@japankatarinet.jp
(HP) http://japankatarinet.jp/

2014. 8. 5 発行

ニュース

大震災を語り継ぐために

大島廣志 (NPO 法人全日本語りネットワーク理事)

2011年3月11日の東日本大震災から5ヶ月を過ぎた8月21日・22日の2日間、宮城県本吉郡南三陸町を訪ねました。南三陸町は2005年に志津川町と歌津町が合併してできた町です。

22日の午前中に志津川地区を見て回りました。海際には瓦礫が山脈のように積まれていました。建物は一部を除いてすべて流され、見渡す限り平坦になった町の中央には、鉄骨だけとなった防災対策庁舎がありました。「津波がきます。避難してください。」とアナウンスを続け、津波に襲われた遠藤未希さんを讃えるメッセージが鉄骨の正面に掲げられていました。言葉なくただただ合掌するだけでした。

2014年3月28日、「語りの祭り」打ち合わせのため、再度南三陸町を訪ねました。命を守る町作りのための盛り土がなされているだけで、3年前の光景とあまり変わっていませんでした。復興への道のりはまだまだ険しいのです。

盛り土に囲まれるようにして、防災庁舎の鉄骨が残っていました。保存か撤去はまだ決まっていません。「語りの祭り」当日の挨拶をお願いするために役場に伺ったとき、防災庁舎屋上で九死に一生を得た佐藤仁町長は「保存するにしても莫大な費用がかかります。」とおっしゃっていました。

東日本大震災では、たくさんの遠藤未希さんがいたのです。防災庁舎を見て遠藤さんを想い、遠藤さんを通して、あの時自らの命を顧みずに人々を救った方々に想いが及びます。錆びて無残な姿の鉄骨には、大震災のさまざまな記憶を甦らせる力がありますし、広島原爆ドームに匹敵する震災遺構だと思っています。

この南三陸町には、18年続く「しづがわ民話の会」があります。震災前は10名の会員がいましたが、震災で亡くなった方もいて、現在は6名で活動しています。皆さんとても熱心な方で、全国の語り手と交流がしたいと言われ、近くであるにも関わらず宿泊し、「夜語り」「分科会」で、南三陸町の昔話や被災の体験を語ってくださいます。

佐藤町長、しづがわ民話の会の会員、ホテル観洋の女将さん、郷土芸能の村岡さん、地元の高校生、さんさん商店街の方々、南三陸町の方は皆さんが被災者です。南三陸町の大震災を語り継ぐのは南三陸町の人たちだけではありません。「語りの祭り」で大震災のありさまを聞き、現在の南三陸町の姿を見る参加者もまた、大震災の語り手になり得るのです。それが「語りは絆」となるのではないのでしょうか。

「『いま』聞いておくこと、見ておくこと。3・11の東日本大震災・・・、その記憶を風化させないで、参加した語り手ひとりひとりの体内に残しておきたい」を心に刻み、「第12回全日本語りの祭り in 南三陸」が開かれます。